

# 祭りが生まれるとき ——震災復興イベントの宗教社会学——

東京工業大学 弓山達也

## 1, 目的

本報告の目的は東日本大震災後に生まれた、いわゆる「復興イベント」の関与型調査を通じて、(1)活用される宗教的文化資源、(2)イベントに用いられるシンボルや当事者の語りに見られる宗教性、(3)イベントに反映される地域の凝集性の問題等を検討し、復興イベントが宗教的な祭りになりうるのかどうかを論じていくことにある。

## 2, 研究の背景・対象・方法

周知の通り、デュルケム(1975:393)は、宗教の最も原初的な形態をトーテミズムに求め、ここで「宗教的観念が生まれたと思われるのは、この激昂した社会的環境における、その激昂そのものからである」とした。言い換えれば、集合的生活の凝集性が聖なる宗教的観念を生み出すという、宗教が社会生活の所産に他ならないことを示したのである。こう考えると、市民の「イベント」に、どのような諸条件が加わると、宗教性を帯びた「祭り」になるのかを吟味することは、宗教社会学上、極めて重要な作業といえよう。

本報告で対象とするのは、福島県A地区で開催された地域住民有志によるイベントである。A地区は戦後漁港として、またその後、貿易港として発展したが、東日本大震災時、津波が沿岸の商工業施設を襲い、関連死を含む死者9名を出す被害があった。現在では主要施設は再建され、地域には新たなショッピングモールが建設中である。

本報告で中心的に検討するイベントは、この地域で1950年代中頃生まれの世代が、自分たちが還暦を超え、新たな地域との関わりと地域の復興を目指して立ち上げたものである。往時の街の賑わいを再現すべく大漁旗百数十枚を小河川に飾り、また地元高校生にも協力を仰ぎ、初回の2016年は1日で、17年は2日にわたってゴールデンウィークに開催された。

報告者は同地区周辺に2011年夏から調査に入り、被災者の宗教施設での避難状況、震災モニュメントの建立状況、街づくり会議等に関する聞き取り調査を行ってきた。そしてこのイベントにはボランティアとして関わり、イベントとその事前・事後の主催者会議や参加高校生の催し物練習に参加してきた。報告者らはこうした調査を関与型調査（科研基盤B「復興期における震災文化の研究—宗教研究からのアプローチと実践—」）と呼び、現在も調査を継続している。

## 3, 結果と考察

先のデュルケム(1975:86)は宗教の定義において「信念」「行事」「道徳的共同社会」をあげている。しかし日本の宗教の特徴は、柳川啓一(1991:5-27)が「信仰のない宗教」と指摘するように、宗教的な信念が不在あるいは曖昧でも、行事が営まれる点にある。もちろん当該イベントは市民主催で宗教的な信念はない。しかしこれが氏神の例大祭とあえて同じ日に開催され、そこに翻る大漁旗の有する象徴性、主催者・協力者・参加者から語られる復興支援をめぐる感謝や決意の言葉の意味、またこの地域が長く抱える諸問題（高齢化、世代間の分断、地域経済の減退、外国人居住者の増加など）がこのイベントに如実に反映されていることを考えると、これを、宗教的機能を担った「祭り」とみなすこともできる。デュルケム宗教論を再考し、A地区近隣の同様のイベントや阪神・淡路大震災時（三木英 2001）と比較することにより、このイベントの宗教的機能がより詳細に理解できよう。

## 文献

- デュルケム, É. 1975『宗教生活の原初形態』（上）岩波書店  
三木英 2001「巡礼の創出、聖地の出現」、同編『復興と宗教』東方出版  
柳川啓一 1991『現代日本人の宗教』法蔵館